

【再話】行商人の夢

昔々、イギリスでのことです。ノーフォーク州のスワファムというところに貧乏な行商人がいました。ある日のこと、男は不思議な夢を見ました。そこには、ロンドンの大きな橋がありました。そして、「ロンドン橋へ行くが良い。良い知らせが聞ける。」

という声が、どこからともなく聞こえてきました。男は、

「何だ、夢か。」

と独り言をいい、ふとんを被って寝てしまいました。けれども、次の日もまた次の日も同じ夢が続くので、最初は気になっていなかった男もさすがに気にするようになりました。そして、荷造りをしてロンドンへ行ってみることにしました。

車も自動車もなかった時代のことです。やっとの事でたどりつきました。男は、ついた当日から店の前を行ったり来たりしていました。けれども、良い知らせを聞くことが出来なかったため、あきらめて橋の上で寝ました。男は、二日目も良い知らせを待ちわびました。人が通るたびに、気にかけていましたが、皆無視をして素通りをしていきました。

さて、三日目になりました。その日も男はあきらめきれず、店の前を行ったり来たりしていました。すると、ある店の主人が出てきて男に言いました。

「お前さんは、三日間も橋の上を行ったり来たりしているが、行商人か。それとも、ものごいか。」

すると男は、

「あっしは行商でも、ものごいでもねえです。あきないをやっています。」

と答えました。

「じゃあ、何の為に。」

男は、夢の話打ち明けました。

「実は、夢で、このロンドンの橋に来れば良い知らせが聞けると聞いたんです。」

主人は、大笑いをし真顔で言いました。

「つまらない酔狂だねえ。だがわしも昨晚不思議な夢を見たんじゃ。確かロンドンのスワファムというところで行商人をしてるらしかった。家の畑の樫の木の下を掘ると宝が出てきたんだ。バカバカしい。私はそんなに酔狂ではない。仕事は真面目にやるのが一番だ。」

と言いました。男は自分がスワファムから来たことを口に出しそうになるも我慢して、主人に礼を言い、飛ぶように家に帰って行きました。そして家の樫の木の下を掘ってみると、山のような宝が出てきました。男が喜んだのは言うまでもありません。

こうして男は、大金持ちになりました。しかし働きものだったため金におぼれることなく真面目に働きました。